

---

# キミは隣

サン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミは隣

### 【著者名】

Z8661A

### 【作者名】

サン

### 【あらすじ】

仕事を見つけるために上京した梓。無事に就職し、マンションを借りる事に。しかし、それが梓にとって騒々しい日々の始まりだった。一つのマンションで繰り広げられる切なく甘酸っぱいラブストーリーがココに…！

## Story・1『上京』

「わあ〜、すつ〜。高いビルばつかだよ」  
新幹線の窓の外には夕暮れに染まりつつある東京の大都市が広がつていて。

「綺麗〜」

徐々に景色の動きがゆっくりになり、暫くすると窓からはホームに立っている2、3の人が見えるだけとなつた。次第に周りの人気が立ち上がり、出入口に向かつて列をつくり始めた。皆、両手に大きな荷物を提げて、とても邪魔そうだ。新幹線の出入口の開くブシユツという音と共に、一斉に入々が下車していく。後ろの人若干背中を押されながらホームへと足をまたぎ、周囲を2、3回見回した。すると、こちらに気付いた一人の女性が早足で近づいて来る。

「梓あ、こつちこつち

「あつ、奈美」

彼女の名前は『美雪 梓』。美雪つていうのは名字で、よく下の名前と間違えられたものだ。茶色の髪は肩に少しかかつていて、外に向かつて元気よくハネている。18歳で、高校時代に就職のため数多くの面接に挑んだが、見事に碎け散つた。

そして、あつちからやつて来る女の子は『愛沢 奈美』。梓の高校の同級生で、就職ではあちこちの会社から引つ張りだことなり、今は東京でファッショングループの仕事に就いている。やはり、ファッショングループは抜群で、髪は緩めのパーーマがかかり、服装は今からファッショングループにでも出るんじゃないのかと思つてしまふほどだ。

「久しぶり。元気にしてたあ！？」

梓は奈美の元へ駆け寄つた。

「元気元気。あんたは？……つて、見りや分かるね」

「しつかし、奈美、なんかすつごくカッコよくなつたよね〜。いか

にも東京の女って感じ。」

「でもさあ、わざわざ東京に来なくても地元で就職すりやイイじゃん」

「それじゃダメなの。あたしは東京で派手な仕事に就いて、優雅

な生活をして、奈美みたいに好き勝手に生きたいわけ。」

「ハア、あたしだって苦労してるんだからね。別に好き勝手なんかしてないよ。それに地元でも就職出来ないあんたがこんな都会でやつていけるのかなあ」

「ああ。東京か。遂にあたしの時代が来たつて感じだなあ。なんの仕事に就こつかなあ。カワイイ仕事がイイなあ。ん、悩むなあ」

梓は奈美の話を全く聞いてない。

「てか、あんたさあ、家に泊めてあげるのはイイけど仕事が見つかるまでの間、だけだからね」

「分かつたるつて。すぐに見つかるから大丈夫。心配御無用」

奈美は呆れた様子でため息をついた。

そして一人はゆっくりと歩き出した。覚める事のない一年分の出来事をお互いに話しながら。辺りは随分暗くなり、さつきまで見えていた駅の姿もすっかり闇の中だ。梓はこれから始まる東京での生活に、期待で胸が弾んでいた。

梓が上京してから数日が経つたある日……

奈美は何やら女性ものの服の絵を描いている。今年の新作を考えているみたいだ。

仕事が一段落し、軽くため息をつく奈美。上に両手を大きく広げ、伸びをしようとした。その時、ジーンズの小さな前ポケットで窮屈そうにしていた携帯電話が騒ぎ出した。奈美は慌てて取り出し、携帯電話の画面を見た。すると、梓からメールが一件入っている。早速、本文に目を通す奈美。その瞬間だった。

「え つー？」

奈美の大きな声はオフィス内の隅々にまで響き渡った。中にいた5、6人の同僚が一斉に奈美の方めがけて視線をやつた。奈美は顔を赤らめて言つた。

「あ……すみません」

それを聞くと、みんなは何事もなかつたように奈美から視線を外し、再び黙々と仕事をし始めた。メールにはこう書かれていた。

“やつた。仕事決まつたよ つ。来週の月曜日から早速来て下さいだつて。なんか……”

メールは凡そ3ページ分にも及んだ。

どうやら梓の仕事が決まつたみたいだ。それにしても驚異的な早さ。あんな女の子を雇ってくれる会社が本当にあるのかあと、奈美はまだ信じられないみたいだ。

そして、次の日から梓の不動産巡りが始まった。ここは東京である。やはり、どこも家賃は異常に高い。給料が出るまでは奈美の家に泊めてもらつてもいいが、梓は出来るだけ奈美に迷惑をかけたくないし、奈美の家から仕事場に通うには少々都合が悪かつた。しかし、一件だけ全ての条件を満たしているマンションがあつたのだ。

## Story・3『マンション』

そのマンションは、上野にある某有名美術大学のすぐ近くにあった。17階建てで、少し古い物件であったため、1DKで賃料4万円。おまけに敷金礼金は無し。大家さんもこんな条件のいい物件はめったに出ないと言っていた。

早速大家さんに連れられマンションを見に行く事に。行く途中、少し遠回りをした。近くにはたくさんの古い寺が並んでいて、太陽に照らされた木の暖かい温もりが薫り、梓はより一層足取りが軽くなつた。たつた数百mの道のりが長く、また短くも感じた。暫く歩くと、大家さんが空の向こうを指を差して言った。

「ほり、あのマンションだよ」

二人の目線の先には薄い灰色をしたマンションが。綺麗な姿勢でとても清潔な育ちの良さそうな建物だった。梓の目にはとても堂々としたマンションの像がくっきりと映っていた。その後大家さんが何か言つていたみたいだが、梓には何一つ聞こえていないようだ。

5分後、とうとうマンションにたどり着いた。

「綺麗なマンションですね~」

梓は心からそう思つていた。

「ええ、ここいらは環境もよくてね。ホコリとかもあんまりしないんだよ」

「でも、こんなに素敵なマンションなのにあんなに安いなんて。何があるんじやあ?」

「安心して下さい。うちは数で勝負してるんで安く出来るんですよ。」

「へえ~」

そんな会話をしながら二人はエレベーターに乗つた。少し窮屈に感じたが、不自由ではない程度なのであまり気にならなかつた。エレベーターはゆっくりと上がって行き、9階のランプが点灯した

時動くのをやめた。ドアが開き、5、6歩ほど進むと壁があった。そこを右に曲がると田の前に長い直線がのびていた。シンプルな両壁には一定間隔でドアが並んでいた。大家さんは梓を導くように歩いて行き、急に足を止めたので梓は危うくぶつかりそうになつた。「やつと着いた。ここだよ」梓は視線を上にずらした。そこには『960』と書かれていた。

## Story・4『期待と不安の狭間で』

『960』……。普通は『901』から始まるはずなのだが、そのマンションは大家さんが鉾路出身らしく『946』から始まっているのだ。大家さんの説明に妙に納得させられた梓であった。そして、ドアを開け、中に足を踏み入れた。

梓はその部屋を一目で気に入った。一人で住むには8畳は十分な広さだった。入って正面にはベランダがあり、梓を歓迎しているかのように外からは暖かい太陽の光が元気よく差し込んでいる。ベランダに出れば草木の薰りが優しく梓の顔をなでた。眠くなりそうなぐらい気持ちよい部屋であった。梓はその場で申込書にポンとはんこを押した。申込書の『美雪』という字はとても綺麗だった。

「えと、いつから入居するかね？」

大家さんは梓に尋ねた。

「じゃあ、明日から」

即答だった。

明日から

どんな生活が

あたしを待ってるのだろう

明日は何をしてるかな

明後日は

梓の心は期待と不安でいっぱいだった

すりへドキドキした

そんな梓に向かつて

ベランダから見える景色は微笑んでいた

その夜……

「へえ～、もう部屋決まったの」

「うん。すっごくイイところなんだよ。」

「で、いつから住むの？」

「明日だよ」

それを聞いて奈美は嬉しそうに言った。

「本当ー!? やつたあ～。」

「ちょっと～、何それ。『もつとここに居てよー』とかないのぉ?..」

「まさか。うるさい居候がいなくなつて清々するよ」

「そつか。あたしがいたら男を家に呼べないもんね～。ごめ～ん。気が利かなくて」

「ち、違うよ。そんなんじゃ……」

「あ、すりへく動搖してる～」

「し、してないよ～」

奈美の手がコップを払い、お茶がこぼれる。

「キヤツ！」

「あ～あ～、こぼしちゃつて。もうしょうがない子だなあ

「あんたに言われたくないよ～」

慌てて拭く物を探している。一人の顔には最高の笑顔が浮かんでいる。その夜はなんだかとても楽しかった。でも、どこか寂しくもあつた。明日からは別々の生活。会おうと言えばいつでも会えるのだが

が、なんだか胸が泣いている気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8661a/>

---

キミは隣

2011年1月26日15時33分発行